

イネ白葉枯病情報第1号

令和3年7月2日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

**早い時期に感染し、出穂期までに発生が多いと減収につながります
前年発生が多かったほ場では特に注意しましょう**

1 前年の発生状況

前年（令和2年）8月下旬に県内48地点139ほ場で実施した巡回調査において、イネ白葉枯病の発病株率は1.73株（平年0.23株）と過去10年で最も多い状況でした。一部、発病株率が100%に達するほ場も確認されました。

発生地域は、尾張地域が中心ですが、西三河地域や東三河地域でも、イネ白葉枯病の発生が確認されました。

2 イネ白葉枯病の病徴と感染経路

イネ白葉枯病の病原菌（細菌）はイネの葉縁にある水孔や傷口から侵入するため、感染すると葉縁部が白く枯れます（図1）。さらに病気が進行すると、葉先が白っぽくなるため、本病が多発した水田は一面に白くなります（図2）。

本病原菌は畦畔や水路に自生するイネ科のサヤヌカグサという雑草の根に寄生し、越冬します。翌年、この雑草の生育とともにイネ白葉枯病の細菌が増殖し、一次伝染源となります。細菌は田面水や用水に入り、それらが風雨によって飛ばされてイネに感染します。そのため、**梅雨期の長雨や台風による強風と大雨によって発生が助長され、特にイネが冠水すると本病がまん延することがあります。**



図1 白葉枯病の感染葉



図2 多発水田での発生状況（全体的に白い）

3 防除対策

幼穂形成期から出穂期までに発生が目立ち、多雨の年には出穂期以降に多発し、減収などの激しい被害となる恐れがあります。**前年発生が多かったほ場では、出穂3～4週間前に防除しましょう。**薬剤は、いもち病防除にも利用されているプロベナゾールやチアジニルまたはイソチアニルが有効です。育苗時にこれらの薬剤を含む箱施薬（Dr. オ

リゼフェルテラ粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤など)を行った場合も、出穂3～4週間前に表を参考にして薬剤散布を行いましょう。

浸冠水しやすい水田では、用排水路の整備を行うとともに、畦畔等の除草を徹底して第1次伝染源であるサヤマカグサを除去しましょう。

なお、イネの品種によって発病程度に差があり、愛知県の平坦地で栽培されている品種の本病に対する抵抗性は、あきたこまちはやや弱、あさひの夢、ゆめまつりは中、コシヒカリ、あいちのかおり SBL と大地の風はやや強となっています。しかし、前年あいちのかおり SBL で本病の発生を確認しています。菌密度が高い場合、抵抗性品種であっても発病する可能性があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場においても防除を行いましょう。

表 イネ白葉枯病に対する主な生育期散布防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	本剤の使用回数	FRACコード
オリゼメート粒剤	プロバナゾール	移植活着後及び出穂3～4週間前 (但し、収穫14日前まで)	2回以内	P2
ルーチン粒剤	イソチアニル	収穫30日前まで	2回以内	P3
ブイゲット粒剤	チアジニル	葉いもちの初発20～7日前(但し、 収穫45日前まで)	2回以内	P3

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/lab0/jfrac/pdf/code_pdf01_2021.pdf を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。